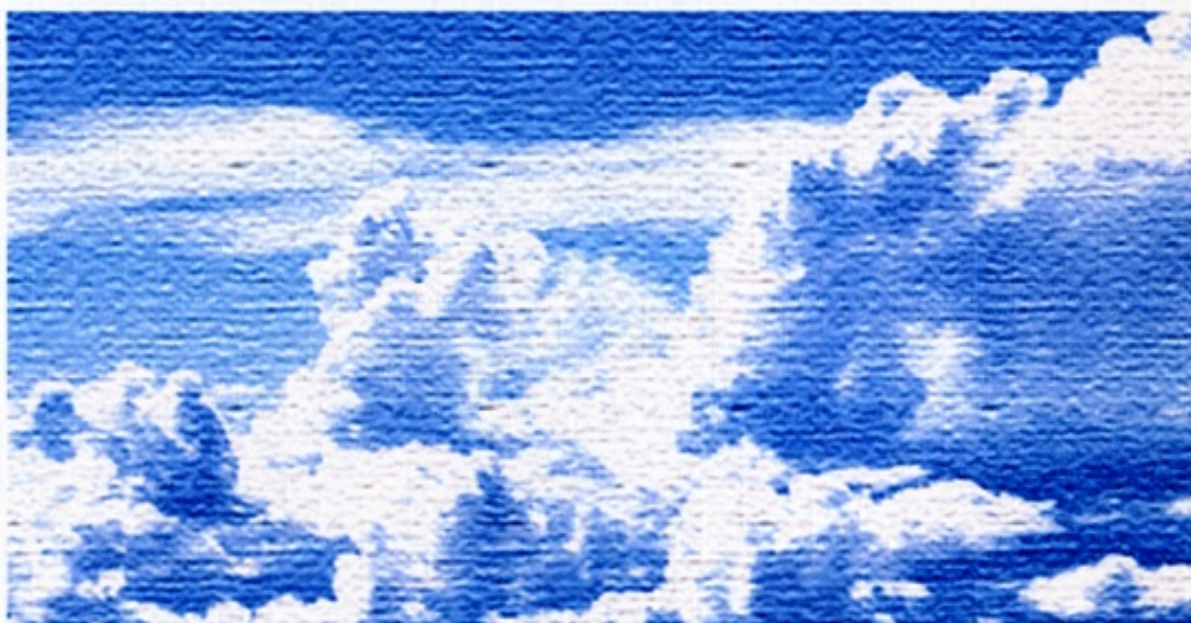


レベインタートの妖精使い
—空の章—



He is a Friend of Fairies. / She is a Fairy of Wind.



He and She are Traveling in Faraway Arcadia.



楽園のあちこちを旅して回る一人の旅人の噂は、静かに広まっていた。

見た目は何ということもない、どこにでもいるような青年だ。

彼は遺跡を荒らす墓暴きでもなければ、悪党を追い詰める首狩りでもない。言葉通り物見遊山を目的とした「旅人」であり、それ以上でもそれ以下でもない。

だが、彼は自然と人の間で噂に上るようになった。

曰く、彼が通った道には涼風が舞う。

曰く、彼に触れられた植物は生气を取り戻す。

曰く、彼の前には闇すらも身を退ける。

曰く、彼の目には何もかもが見えている。

曰く……彼の友は楽園全ての妖精や精霊である。

故にかの旅人は故郷の名を取ってこう呼ばれる。

『レベントートの妖精使い』……と。

目次

- 01 風の生まれる場所
- 02 天球儀
- 03 誰そ彼
- 04 飛行機雲
- 05 アザー・ブルー
- 06 星を数える
- 07 遠雷
- 08 虹の根元
- 09 夜間飛行
- 10 天使の梯子
- 追記 エルスティアの花嫁

レベントートの妖精使いは、途方に暮れていた。

「はー……ねえわー……」

本日何度目かもわからぬため息を漏らし、窓の外を見やる。外には、そりゃあもう色んなものを通り越して笑えてくるほどの強風が吹き荒れていた。ごうごうという音が辺り構わず鳴り響き、立ち並ぶ木々など今にも折れそうなほどにしている。

これでは、船も飛空艇も出せない。旅の中継点として一日か二日ほど滞在しようと思ったのだが、この風のせいで既に彼は一週間ほど足止めをくらう羽目になっていた。

出来ることもなく食堂でぐだぐだしている彼の呟きを聞きつけ、宿の主人はからからと笑う。

「まあ、こればかりは自然現象だからなあ。仕方ないさ、旅の人。もう数日すりゃあ、ぱたっと止むさ」

「自然現象、なあ……」

何とも納得のいかない表情で、妖精使いは再び窓の外に目を戻す。普通なら目に見えない「風」も、妖精使いの目にかかれば空気の妖精が好き勝手に踊り狂っているように見える。その様子は、正直彼の目から見ても尋常ではなかった。普通ならばもう少し、妖精の間にも独特の秩序のようなものが見えるものだが、これでは秩序も何もあったものじゃない。

だが、宿の主人に言わせて見れば、数日に渡って続く強風はこの時期特有のものだという。故に、この時期が近づくと町の人間は必要なものを買込み、各々の家に籠もるのだという。本当に、妖精使いがこの時期に来たのは不運だったと主人はおかしそうに言っている。

とすると、ここの妖精にも一定の決まりごとがあるのだろうか。妖精に話を聞いてみようにも、この様子じゃまず自分の声を聞き届けてもらえとも思えないが。

宿の主人も、彼の視線を追うかのように窓の外に視線を向けて、言う。

「それにしても、今年は随分と激しいなあ。風の海の王様がお怒りかな」

「風の海の王様？」

聞き慣れない言葉に、妖精使いは主人の言葉をオウム返しにする。宿の主人は「ああ、君は旅の人だから知らないのか」とおかしそうに笑って、説明を付け加える。

「この町には昔、風の海を目指した男が住んでいたのさ」

「ああ……そりゃあ知ってるけど」

事実、その噂を聞きつけて妖精使いはこの町に立ち寄ったのだから。

風の海を目指した男、と言えは樂園ではただ一人のことを指す。

何もかもを捨ててでも空を飛ぶことを目指し、人に『飛空艇』という名の翼を与えた男。魔道機関の基礎体系を確立した希代の天才『飛空偏執狂』シェル・B・ウェイヴ。

妖精使いはテーブルの上に突っ伏して、唸る風の音をBGMに言う。

「奴さんも物好きだよな、こんな風の強い場所選んで船を飛ばそうとしたってことだよな？」

記録が正しければシェル・B・ウェイヴはユーリス神聖国首都センツリーズの出身だ。「センツリーズ出身」と言っても身元が曖昧な孤児のため正確な出自はわからないのだが、センツリーズの神殿で育てられたと伝えられている。

その後、仲間とともに各地を放浪した後にこの町にたどり着き、本格的に飛空艇の開発に着手したとされているが……

「いや、当時はこんな激しい嵐なんて全くと言っていいほどなかったんだそうさ。だがな、シェルが影追い

の手に掛かって殺されてから、町に強い風が吹くようになった。彼が死んだこの時期に、な」

そう、シェル・B・ウェイヴは最終的には異端研究者として、異端審問官『影追い』の手によって処刑されている。妖精使いがその当時のことを知っているわけではないが、シェルが生きていた時代は現在よりも遙かに「異端」の基準が厳しかったはずだ。現在では魔道的一种とされているものも異端と捉えられていたとまで言われている。

故に、彼は楽園に魔道機関をもたらした天才であると同時に、敬虔なユース信者からは楽園に混沌をもたらした最大の異端研究者として今もなお忌まれ恐れられている存在である。

とはいえ、シェルは周囲の視線など意にも介さず、自分の目的のために短い生を駆け抜けた。生涯彼の瞳が見つめていたのはただ一つ、自らの頭上に広がる風の海のみ。

そしてシェルは最期の瞬間、処刑人の前でとても残念そうに、しかし笑顔でこう告げたという。

『空が、見えないな』

空を求め続けた『飛空偏執狂』らしい辞世の言葉だ。あくまでこれも彼に関する数多い言い伝えの一つでしかないが、きっと事実だろうなと妖精使いは思っている。

シェル・B・ウェイヴはどこまでも真っ直ぐすぎて、曲がることを知らなくて、それ故に人とは常に違う方向を向き続けていたような人間だ。各地に残された記録から言っても、「実際に会った」感想から言っても。

ごうごうと、風が鳴る。

それにしても、こいつがシェルの怒りだと伝えられているのか。妖精使いは不意におかしくなってくつくと喉で笑った。

「……奴は、怒ってなんかいねえよ」

宿の主人には聞こえないように、小声で呟く。

確かにシェル・B・ウェイヴは感情的で激しやすく、嵐のような性格をしていたという。だが、死に際して笑っていたようなあの男が、今もなお怒っているとは思えない。あくまでそれはこの町に伝わる「言い伝え」に過ぎないのだ。

本当のことを言うならば……

ついと視線を窓に向ける。

風は怒っているのではない、ただ「騒いでいる」のだ。まるで祭のごとく、無数の風が声を上げて笑いはしゃぎながら辺りを駆け回っている。

そして、そんなお祭り騒ぎの中心で楽しげに笑う黒髪の男の姿を幻視して。妖精使いは苦笑を浮かべてもう一度だけ小さくため息をついた。

『異端』の定義は、時代によって微妙に異なる。

基本的には「世界樹がもたらす魔法に基づかない機巧技術や、女神ユーリスの教えに反する思想・知識」のことであり、古くは魔力を用いた魔道機関ですら異端であると排斥された。それも既に数百年も昔のことになるが……レベンタートの妖精使いはそんなことを考えながら、ランタンに灯った魔力の明かりだけを頼りに今にも崩れそうな階段を下っていく。

「足元をつけてよね、落ちたら末代まで笑ってやるから」

「わかってるっつの。ちと黙ってるお前は」

耳元でぎゃいぎゃい騒ぐ、彼にしか見えない相棒の『風』に厄介そうな視線を向ける。と言っても契約関係ではないはぐれ妖精の『風』のことである、彼の言葉など聞き届けようともせず、一人で勝手に喋り続けている。

とりあえず彼女は無視しておこうと決めた。

先導する狸人の異端研究者は、別段彼と妖精の会話には口を差し挟もうとはしなかったが、不意に「しかし物好きな奴もいるもんだ」と振り向き毛むくじらの顔をにやりと笑みにする。

「女神さんが寛容になったからといって異端は異端、『影追い』に追われても知らんぞ」

「別にいいだろ。知りたいって思うことに罪はねえ。別に女神に迷惑かけるつもりもねえんだしさ」

「まさしく異端研究者の言い分だな。お前さん、若いのに道を踏み外すんじゃないぞ」

「はは、踏み外してる真っ最中かもな」

そこに、研究者には聞こえないとわかっている『風』が茶々を入れる。

「既に全力で踏み外して気づいたら逆方向だったりしてね」

妖精使いは、異端研究者ではないが異端も否定しない。それどころか女神の教えよりよっぽど異端の知識の方が共感できるとも思っている。とはいえ女神が創りたもうたこの楽園では異端であるというだけで追われることになる。故に、普段は公言することを控え異端には興味ないというポーズを作っている。

それが、上手い世渡りというものである。きっと。

しかし……今回ばかりは妖精使い自ら異端研究者の下に赴き、彼が秘密裏に保管しているとある装置を見せてもらいたいと申し出た。何も、妖精使いに特別な事情があったわけではない。ただ風の噂に聞いた装置を、一目見てみたかったのだ。

「で、この先にあるのか？」

「ああ、ちょっと待て」

階段が途絶え、巨大な金属の扉が立ちはだかった。研究者がそっと手を触れると、扉はまるで生きているかのように音もなく開く。

その瞬間、耳に飛び込んできたのは歯車が回る音色。扉を開いたことでどこかの機巧が動いたのだろう、途端、部屋が仄かな魔法の明かりに照らし出される。

「わ、これ何？ でっかーい」

『風』が驚きの声を上げる。妖精使いにも一瞬巨大な輪が組み合わさって出来た球体が「何」であるのかはわからなかったが……ゆっくりと歯車で動くそれを見ているうちに理解した。

「天球儀だ」

「てんきゅうぎ？」

『風』の問い返す声は研究者には聞こえない。ただ、妖精使いの言葉を聞いて研究者が小さな目を驚きに

丸く見開いた。

「お前さん、知っているのか」

「まあ、一応な。アーミラリ・スフィア……輪で星の運行を表す球体。天球上の見かけの星の動きを再現するための装置、だが」

その天球儀は、まさしく機巧仕掛けだった。足元の板には無数の歯車が組み合わさっていて、文字盤が今日の日付と時刻を指し、星の位置や高度を細かく示している。どうやら時計と天体観測機器としての機能も兼ね備えているらしいと理解して小さく唸る。

「こんな精巧なもんを造れる奴なんて、今の楽園にはいねえはずだ。発掘されたもんか？」

楽園に本来機巧は存在しない……と「言われている」。だが、女神降臨以前には機巧による文明が存在したのだと異端研究者の多くが主張し、実際無数の機巧が発掘されている。これもその一つなのかと妖精使いは思ったのだが。

「元になった機巧はあるかもしれないが、これは魔力を動力としている。驚くべきことに、これはつい三百年前ほど前に造られたものだ」

「三百年つーと、ちょうど大戦と魔女騒乱辺りか……確かに当時はとんでもない研究者が多かったとは聞くけど」

三百年ほど前は女神の加護が一番衰えた時代とされている。女神を信じぬ者は機巧を用いて楽園に長き争いをもたらした。ただ、その結果として数々の分野で天才的な研究者が現れ、魔道機関という新たな技術が誕生したことも否定はできない。飛空艇を造った『飛空偏執狂』シェル・B・ウェイヴもちょうどその時代の人間だ。

「……とすると、そういう研究者どもが集まってこいつを造ったってえわけか」

「いや。記録によれば、この天球儀を造ったのは一人の異端研究者だ」

「たった一人で？ こんなデカブツをか」

「ああ。我々異端研究者は『彼女』の名を取ってこう呼んでおる」

ふと、研究者は何処か遠いものを見るような目をして、言葉を落とす。

「『アルクエル・アーミラリ』と」

アルクエル・アーミラリ。

その響き確かめるように、妖精使いは口の中で呟く。

「アルクエル、ってもしかして」

『風』の言葉に、妖精使いは頷きと共に答えた。

「アルクエル夫人……『鋼鉄狂』フィーネ・ルーティ・アルクエルだ」

アルクエル夫人。数百年前に存在したとされる、命令魔法の専門家にして天才的な異端研究者の女性。『鋼鉄狂』とも呼ばれていたシェル・B・ウェイヴの流れを汲み、初歩的な機巧と魔法を融合させた技術、魔道機関の基礎を創りあげたとされている。ただ、その実体は今となってはまるで知られていない。生没年も定かではない、ほとんど伝説と言ってもいい存在だ。

けれど、妖精使いはこの場に来て確信した。

彼女は確かにあの日の楽園に存在し……自らの命が尽きるまで、この天球儀を造り続けていたのだ。心の示すままに星を見上げ続けた彼女らしい「作品」。

仄かな明かりの中で歯車が回る。星が動く。この空全てを暴き出す、絡繰仕掛けの天球儀。だがそれは単に見かけの空に過ぎない。本当に彼女が求めたのはそれよりもずっと先、本物の星空だと妖精使いは知っている。

「これが、あの子の『願い』かあ……でっかいな。でっかすぎるよ」

ぼつり、空気の中に溶けた『風』の言葉に、胸が締め付けられる。

彼女はもう何処にもいない、この機巧が作られた意味を理解する者も絶えてしまった。

煌く無数の星、巡る月と太陽。彼女が目指した場所をはるかに遠く、遠すぎて……それでも。

「でかすぎてもいつかは叶う願いだ。かつては確かに届いたんだから」

誰がそれを担うのかはわからないけれど、絶対に届くと信じている。

主を失った天球儀を見上げたまま、妖精使いははっきりと言葉にした。

「あの、星の海に」

夕日が地平の向こうに消えようとしている黄昏時に。
レベントートの妖精使いは、ただ、呆然と立ち尽くしていた。

無残に破壊された、魔道二輪を前にして。

魔道二輪とは、その名の通り魔道機関で造られた自動二輪車の総称である。小型化、高性能化が進む魔道機関だが、そもそも陸上を進む乗り物に乏しい樂園では「自動車」の開発が著しく遅れていた。数十年前までは、飛空艇が小型化し一般人にも手の届くものになっている傍ら、普通に馬車が道をはたごと走っているご時勢だったのである。

近年になって魔道機関の急速な進歩とともに陸上の乗り物も開発されるようになり、町でも大きめなサイズの魔道四輪はそこかしこで見られるようになった。

しかし、まだ一人乗りの自動二輪車はそこまで普及しておらず、普及していないということは高価であるということでもあり。

その、一般人にとっては相当お高い魔道二輪が。
やっとのことで自分のものになった、最新型の魔道二輪が。
気づけば、木っ端微塵になっていたのである。

「ふ、ふふふ、ふふふふふ」

妖精使いの唇から、乾いた笑い声が漏れる。いつもは明るい光を宿している海色の瞳も、今日ばかりは暗く淀んでいる。それどころかあらぬ方向を見つめているような気がする。相棒の妖精『風』が流石に不安に思い「大丈夫ー？ 見えてるー？」と妖精使いの目の前で半透明の手を振ってみるが、妖精使いは取り合わない。

『風』は相手にして貰えないと知ってむうとむくれつつも、目の前の惨劇に目を向ける。魔道二輪は、そりゃあもう執拗なまでに破壊されていた。これを修理屋に持っていったところで「で、これ原型は何なんですか」と言われかねない。そのくらい完璧に破壊されていた。

「ま、まあこれは、ショックでかいよね……」

いつもならまず一番に騒ぎ立てる『風』も、今回ばかりは妖精使いをからかう気にはなれず口端を引きつらせる。

『風』は魔道機関に対し特に思い入れがあるわけではないが、妖精使いが魔道二輪にかけた情熱は嫌というほど見せ付けられている。妖精使い曰く「単車は男の浪漫だろ」。『風』は女なので男の浪漫が何たるかはやっぱりよくわからないのだが。

ともあれその「男の浪漫」を叶えるべく妖精使いは旅の合間にこつこつ金を貯め続けていたのである。金を集める手段があまり大きな声では言えない手段だったのは、この際気にはしてはいけない。手段が何であれ妖精使いは自分が考えうる限りの努力をしたのである。

で、その努力の結果がこれだ。

そりゃあ、意識の一つもぶっ飛ぶというものである。

「でも、誰がこんなことやったんだろ？」

『風』は首を傾げる。これは、単に「殴って壊した」ということではない。原形を留めない破壊っぷりからは明らかに妖精使いの心を折ろうという悪意が感じられる。

その時。

「はっはっはっは、見たか、レベンタートの妖精使い！ 素直に僕の言葉に従わないからこうなるんだ！」

唐突に、場違いかつ近所迷惑な高笑いが響きわたった。

妖精使いと『風』は同時にぱっとそちらを向く。こういう時ばかりは何故か息の合う二人である。

そして、二人の視線の先には木肌色のローブを身に纏った一人の少年がいた。楽園の成人人間男性にしては背の低い方である妖精使いと比べても相当に背が低く、今にもローブの裾を引きずってしまいそうだ。赤みがかった肌と丸い鼻を見るに、どうやらドワーフのようであった。

そんな小さな体のどこからそんな声が出るのかと問いたくなるような少年の笑い声が響く中、虚ろな目の妖精使いはぼそりと呟いた。

「誰だよお前」

「だ、誰だよって、僕の手紙を読んでいないのか！」

手紙？

見覚えのない少年の言葉に引っかかるものを感じて、『風』は首を傾げた。ちなみに妖精使いは俯いたまま無言でドワーフの少年を見つめている。上目遣いで。

「……ああ、もしかして三日くらい前に宿の窓に挟んであった手紙のこと？ 『最強の妖精使いの座をかけて勝負しろ、町一番の大樹の下で待つ』っていう」

元より妖精使いとしてのプライドなど持ち合わせるはずもないレベンタートの妖精使いは、ただのイタズラだろうとあっさり破って捨ててしまっていたことを思い出す。だが、そういえばあの手紙の末尾には何やらとんでもなく物騒な文面が書いてあったはずだ。

「『もし、応じなければ貴殿の一番大切なものが永遠に奪い去られることになるだろう』……って、あっ」

『風』の視線が一点に留まる。

そう、かわいそうなくらい徹底的に木っ端微塵にされてしまった魔道二輪に。確かにそれは「一番大切なもの」だった。最低でも、今この瞬間の妖精使いにとっては。

少年は勝ち誇った笑みを浮かべ、無骨な指をびしりと妖精使いに突きつける。

「その通り！ さあ勝負だレベンタートの妖精使い！ このオグルクの妖精使い、バジル・エーベルが」

「まあいい、お前が誰だろうと俺にゃ関係ねえんだよ」

少年の名乗りを遮り、妖精使いは無造作にゆらりと一步を踏み出す。とても落ち着いた喋り方だったが、明らかに目が据わっている。その静かな迫力に、バジル少年も思わず言葉を飲み込んでしまったようだった。

「ただお前が俺の愛と努力の結晶ジェイミーくんを木っ端微塵にしたという事実だけわかればそれでいいんだ」

「よくわかんない名前ついてた！」

『風』が反射的にツッコミを入れるが、もちろん妖精使いは聞いちゃいないわけで、一步、また一步バジルに迫っていく。ものすごくドス黒いオーラを漂わせながら。

明らかにそのオーラに飲まれかけていたバジルだったが、何とか首を横に振って胸を張る。

「ははは、そうだかかってこい、レベンタートの！ お前の魔法に打ち勝てば、この僕が……げはあっ！」

やっぱり、バジルの言葉はあっさり遮られることになった。今度は、情け容赦ない妖精使いのチンピラ蹴りによって。ころんと地面に倒れたバジルは一瞬何が起こったのかわからず目を白黒させていたが、やっと自分が何をされたのか気づいたらしく非難の声を上げる。

「ま、待て！ 僕は妖精使いとして、勝負を挑んで……」

「誰が勝負をするって言ったよ？」

妖精使いは唇の端をつり上げて、笑う。

何だかんだでつきあいの長い『風』ですら逃げ出したくなるくらい、壮絶にして冷酷な笑い方だった。

「妖精なんて使うまでもねえ。これは、制裁だからな」

もしくは、一方的な私刑。

言い切った妖精使いの顔を見上げて、バジルは悲鳴を上げるしかなかった。『風』は目を逸らしていたからわからないけれど、とんでもなく恐ろしい顔をしていたのだろうなということは想像できる。

――実はこいつって妖精使いとか言われてるけど、実質ただのチンピラだしなあ。

宣言通り妖精の力も借りようとせず一方的にバジルを蹴り飛ばし踏みつける妖精使いを横目に見やり、『風』はやれやれとばかりにため息をついた。

だからといって、バジルを助ける気はなかったわけで。

彼女は石碑の上に腰掛け、スカートの下から覗く細い足をぶらつかせていた。空はよく晴れていて、青い空を横切るように一筋の白い雲が走っている。おそらく、飛空艇が生み出した風切り雲だろう。

そんなからりと晴れた空を見上げ、しかし彼女は深くため息をつく。

「は一あ、暇だなあ」

周りには彼女の仲間が駆け回っていたけれど、彼らは自分勝手に飛び回っているだけで人の話なんかまともに聞きやしない。ただでさえ個人主義な上に相手のことなんて考えない連中の集まりなのだから。

それにしても……と、彼女は空にかかる翼の痕跡を見つめながら考えずにはいられない。

風切り雲は空を切り裂き、遙か空の向こうまで続いているというのに。

自分は今もこの場に留まったまま、一步も動けずにいる。

別に、離れられないわけではないのだ。彼女は誰に命令されたわけでもない、どこか遠くへ行こうと思えばいつだって行けるのだ。ただ……ここを離れるだけの理由がないのも確かではあった。

彼女は腰掛けた石碑をべちりと叩いてみる。もちろん、返事がないことくらいはわかっているけれど。

ここには誰も眠っていない。どこかの誰かさんの功績を称えた仰々しい言葉だけが書かれていて、その実誰かさんはずっと遠くの存在だ。たまに帰ってくることはあるけれど、時間の流れというのは残酷なもので、それはもうとっくのとうに「彼」とは言えないものになっている。

別に、それを嘆くつもりだってない。元より誰かさんと自分が違うものだという事は、嫌というほど理解している。

理解は、しているが。

「……なーんか、やりきれないなあ」

誰も聞いてないとわかっていながら、呟かすにはいられない。何もかも、遠い昔の話だ。石碑は苔むして角なんてすっかり丸くなってしまったし、いつの間にやら辺りの風景だって変わってしまった。

変わらないのは自分の頭上に広がる青い空だけ。

どこかの誰かさんが夢見続けた場所だけ。

彼女は特に何を思うわけでもなく視線を空から地面に落とそうとして……不意に、鮮やかなアオが視界に飛び込んできた。

空の青とも違うアオ。たとえるならば、珊瑚を育む浅く温かな海の色。そんな色の瞳が彼女を見上げていたのだ。

「誰？」

彼女は驚きと共に問いかける。普通、彼女の姿は他の何者にも見えないはずなのに。思いながら彼女はその人間を無遠慮に眺めてみる。

海色の瞳の持ち主は、まだ若い青年だった。ぼさぼさの焦げ茶色の髪と枯れ草色の外套を強い風に靡かせ、少年のようにも見える顔を不機嫌そうに歪めていた。青年は目にかかる前髪をかきあげて、高めのテノールで言う。

「しがない旅人だよ。お前等のせいでこんな辺鄙な町に足止め食らってた、な」

「あはは、ごめんごめん」

楽しげに笑いながら彼女は石碑から飛び降りた。素足のままではあったが、彼女の足が草を踏むことはない。地面から少しだけ浮き上がったまま、彼女は青年の顔を覗きこもうとする。その青年は、嫌そうな顔をしてすぐに視線を逸らしてしまったけれど。

青年の反応に彼女はちょっとむっとしながら、両手を腰に当てて胸を張る。

「でも、もう風は止むよ。あいつも持ち場に帰ったからね、お祭り騒ぎも終わるでしょ」

すると、青年は視線を逸らしたままではあったが大げさに肩を竦めてみせる。

「死んだ後もはた迷惑な奴なんだな、かの飛空偏執狂とやらは」

「へえ、わかるんだ、あいつが来てたって」

「わかるさ」

海色の瞳が遠くを見つめる。そこで踊る、風の精を捉えているのだということは傍目で見ているとわかる。

なるほど、精霊視なのかと彼女もやっとのことで納得した。人の中には妖精や精霊を「見る」ことが出来る瞳を持って生まれる者がいる。おそらくこの青年もその一人なのだろう。遠い昔に死んだ男の姿を捉えるくらいには強い瞳を持つ精霊視。

青年は、ゆっくりと彼女に視線を戻す。決して目を合わせようとはしないけれど、その表情からは先ほどのような陰は感じられなかった。

「で、あんたは風だろ。そんなにはっきりとした自我を持つてる風も珍しいけど」

「あたしはちょっと特別だからね」

彼女は自慢げに笑ってみせる。

妖精や精霊と呼ばれる存在は、基本的には明確な人格というものを持たない。人という存在でない以上、人が思うような「人格」を必要としていないのだ。

妖精使いと契約している妖精は契約者に影響され自我を持つことも多いが、誰にも縛られていない彼女のような妖精が人間とここまで言葉を交わせるということは皆無に近い。

ただ、彼女としては自分自身が「ある」ことに誇りはあるにはあったが、自我を持っていたところで言葉を交わせる相手がいないのだから、そんなもの無意味だとも思い始めていた。

けれど――

「ね、君」

「あん？」

「あたしと契約しない？ あたしをここから連れてってよ」

半分は冗談で、半分は本気。誰かに縛られるなんて、風たる彼女には堪えられるものではなかったが……このまま何も変わらない毎日よりはその方がまだマシかもしれないとも思う。どちらが幸福なのかなんて、今の彼女にわかるはずもなかった。

そんな彼女の言葉を聞いて、青年はあからさまに目を見開いた。それから、何とも形容のしがたい表情で言い放つ。

「嫌だね」

あまりにそっけない拒絶の言葉に、彼女は頬を膨らませて青年に迫る。

「な、何だよ！ 失礼じゃない、あたしみたいなすっごい妖精と契約できるなんて、めったにないんだからね！」

自分で自分のことを「すっごい」と言ってしまう辺りが彼女らしいところだが、実際、妖精としての彼女の能力は他の空気の精を遙かに上回る。その力を人のために振るったことなど一度もなかったけれど。

精霊視である青年が、彼女の実力を測れないとも思えない。しかし青年は「はいはい」と気のない返事をするばかり。

「お前等と契約はしねえって決めてんだ。別に妖精使いになりたいわけじゃねえしな。でも」

青年は彼女に背を向け、ぶっきらぼうな声色で言い放つ。

「勝手についてくるなら、何も言わねえよ」

その、言葉の意味を理解するまでに、数秒。

彼女は苛立ちをすっかり忘れて、きょとんとした表情で首を傾げる。

「……いいの？」

「勝手にしろ」

それは、とても遠回しな肯定だった。

誰に命令されたわけでもなく、誰が彼女を縛ろうというわけでもない。今までも、そしてこれからも。

ただ、今までの彼女にはきっかけが足りなかった。

ほんの一欠の、きっかけが。

彼女は一瞬だけ石碑を振り返って……そこに誰もいないことを確認して、勢いよく空を蹴った。ふわり、頭の上で結ったポニーテイルが青い空に揺れる。

ゆっくりと歩み去ろうとしていた青年の肩に飛びつき、細い腕を絡めてにっと笑う。

「じゃ、勝手についていくからね！」

あんたがそう言ったんだから、恨まないでよね。

そう言った彼女に、青年は初めて笑った。はにかむような、ほんの少しだけの微笑みではあったけれど、それが彼なりの笑顔なのだとは彼女は確信した。

かくして、彼女は風の丘を去り――

この時から、二人の旅が始まる。

そこには、一枚の絵があった。

壁に掛けられた絵の前に立ち尽くした妖精使いは、半開きになった唇から感嘆の息を漏らす。

「間抜け面ー」

「うるせえ」

はやしたてる『風』に向かって、レベントートの妖精使いは微かに眉を寄せて言い放つ。妖精使いの言葉が悪いのはいつものことなので、『風』は彼の横にふわふわ浮かんだまま同じように絵を見つめる。

「でも、確かに綺麗な絵だよ」

キャンバスの中に描かれたのは、真っ青な空だった。その中天に輝く太陽、光を浴びて白く浮かび上がる雲、そして緑に包まれた丘を蹴って走る、一人の男の姿が鮮やかに描き出されている。

旅の途中にふらりと立ち寄った小さな画廊だったが、ここに並べられている絵はどれも鮮やかながら優しい筆致で描かれていて、絵の良し悪しなどわかるはずもない妖精使いでさえ、その美しさに目を奪われるのだ。また、はっきりと輪郭を引かずに色を重ねていく様式は楽園でもかなり珍しい描き方であり、それもまた目を引く要因であった。

その中でも、この青空の絵は何故か妖精使いの心を掴んで離そうとしなかった。この画廊にある絵は全て一人の画家によって描かれたものだそうだが……

「おや、お客さんですか」

声をかけられて、妖精使いと『風』は同時にそちらを見た。そこにはひよろりとしたエルフの青年が立っていた。見た目は妖精使いとさほど変わらないから、エルフとしてはそれなりに若い方だろう。人間の妖精使いよりはどう考えても年上のようなのだが。

妖精使いは素早く青年の頭から足先までを見渡し、そのあちこちが絵の具に汚れているのを確認して言う。

「ああ……アンタがここの画家さん？ コラル・クロームとかいう」

「はい。どうでしょうか？ できれば率直な意見を聞かせていただきたいなと思ひまして」

コラルは人懐こそうな笑みを浮かべて妖精使いと『風』を見やる。『風』もコラルにつられるように笑顔になって言う。

「すごい綺麗だよ。あたし芸術ってよくわかんないんだけど、好きだなあ、こういう絵」

「わ、ありがとうございます」

コラルはちょっと照れたように頭をかきながら頭を下げる。

そういえば、普通に『風』が見えているのだなと妖精使いは一拍遅れて気づいた。精霊や妖精を視る能力は生まれつきで備わるものであり、さほど人数も多くないのだ。とはいえ精霊視は一つの町に必ず一人はいるという程度の珍しさなので、あえて指摘するほどでもない。

ただ、このようなどこか幻想的な絵を描けるのは、人と違う視点で世界を見つめているからこそなのかもしれないと思う。

精霊視の見る風景は、他の誰にも理解できないものだ。妖精使いがそうであるように。

妖精使いは何となく複雑な心持ちになりながら、改めて青空の絵を見る。草の香りを含んだ風の匂いさえ感じられそうな、青と緑の世界。

その境界線を孤独に駆けていく、男の影が脳裏に焼き付く。

ああ、そうか。

妖精使いは息が詰まるような感覚を覚えてぐっと手を握りしめる。

——自分は、この風景を、この男を知っている。

「……なあ、この絵、だけどさ」

「はい？」

「何かモデルになった風景とか人とかいんの？」

妖精使いの問いに、コラルは「そうですね」と言いながら絵に向き合う。だが、彼の常葉色の瞳は、目の前の絵ではなく遙か遠く、それこそ風の海を見つめているようにも見えた。

「これは、私の友人を描いたものです。と言っても、実際に見て描いたものではないですけど。イメージ、と言った方が正しいでしょうか」

「友人？」

「ええ。空が好きで、何かといえば空を見上げてて。そして、いつも全力で走っていた。どんな場所にあっても、迷わず走り続けていた」

そんな人でした、と。

コラルは言った。その一言で、妖精使いの想像が正しかったことが証明された。

『機巧の賢者』か」

ぼつり、妖精使いが言葉を落とす。それを聞いたコラルの目が驚きに見開かれた。

「よくわかりましたね」

「あー……ま、俺も一応知り合いだから、さ」

だった、と言った方が正しいかな。そう付け加えて妖精使いは目を細める。

「世間じゃ散々に言われてるけど、アイツはこういう奴だよな。誰よりも天才だった、誰よりも迷いがなかった、だから誰にも理解されなかった」

それこそ、最終的には処刑されてしまった希代の異端研究者、『鋼鉄狂』『飛空偏執狂』シェル・B・ウェイヴのように。羨望と嘲笑をもって賢者と呼ばれた男は、そうやって楽園の闇の中に消えていった。

その後のことは、誰も知らない。

今もなお、楽園全土を騒がせた異端研究者……『機巧の賢者』ノグ・カーティスの行方は誰にも知られていないのだ。

「アイツはただただ、真っ直ぐなだけだった。はっきり言って俺は大っ嫌いだけどな」

「あはは、それこそ散々な言いようですね」

コラルは楽しげに笑ってから、不意に寂しげな顔になって空色の絵を見やる。

「正直、ちょっと悔しいんですよ。私はいつまでも友達のもりだったのに……最後まで彼を理解することはできなかった。何となく、置いていかれたような気分になってしまっ」

絵の中の男は、わき目もふらずに足下の草を踏み、ただ真っ直ぐ空に向かって駆けていく。決して後ろを振り向いたりもしない……それが、コラルの目から見たノグ・カーティスという男だったのだろう。それは決して間違っていない、間違っていないけれども。

妖精使いは小さく息をつき、浅い海色の瞳を絵に投げかけ、ぶっきらぼうに言う。

「多分、奴も同じことを思ってたんじゃないかな」

「え？」

「奴は誰にも理解されない。だけど『理解されない』ことを理解できないほど突き抜けちゃいなかった。天才の孤独なんていうけどさ、アイツはアイツなりにずっと取り残されたような気分だったはずだ」

俺は凡人だから、奴の気持ちになることはできないけれど。

そう言いおいてから、妖精使いは微かに笑う。

「だから、せめて全力で幸福を祈ったんだ。自分に関わった者全ての幸せを。きっとアンタの幸せだって祈ってたはずだ」

そのために、『機巧の賢者』は誰にも理解されない高みを目指したのだから。わき目もふらず、振り返らず。高く、高く、幸せの色を追い求めていたのだから――

コラルは啞然とした表情で妖精使いを見て、ゆっくりと表情を笑みの形にした。そこには既に寂しさの色はなく、とても穏やかな表情をしていた。

「あなたは、本当に彼のことをよく知っていますね」

「別に知りたくもなかったんだけどな。ああ、そうだ」

妖精使いはあくまでどこか不機嫌そうなそっけない口振りで言ってコラルに視線をやる。コラルは別段気を悪くした様子もなく「何ですか？」と問い返す。

「この絵を見たがるだろう奴がいるから、今度つれてくるわ。多分、俺よりはまともに話が弾むんじゃないかな」

「はあ……どなたですか？」

「そうだな」

不思議そうに首を傾げるコラルに対して……妖精使いは初めて、いたずらっぽくにと笑って見せた。

「この絵と同じくらい、綺麗な空色をした奴さ」

「だーかーらー！ 最強の妖精使いなんて座、欲しかねえんだっつもの！ 最強でも最凶でも勝手に名乗ってろ、そして二度と俺に関わるな！ そこで頭でも冷やしてろ！」

春の鳥がさえずる明るい森の中。

レベントートの妖精使いは地面に体の大半を埋めたオグルクの妖精使い、バジル・エーベルをびしっと指差す。何故バジルが地面に埋まっているのかなんて決まっている、もちろんレベントートの妖精使いが「本気を出した」からだ。

土から唯一突き出している頭を容赦なく踏みつけ、妖精使いはバジルに背を向ける。その妖精使いの手の中には、バジルから奪った財布がしっかり握られていたりする。彼は、未だに愛する魔道二輪を壊されたことを根に持っているのである。バジルから奪う金では到底魔道二輪を買い直せる額には至らないのだが、その辺は気分の問題だろう。

そして、バジルは地面に埋まったまま妖精使いを見送ることしかできなかった。

これで、五つ目の黒星だ。

こちらを見ようともしないレベントートの妖精使いの気を引くために新品の魔道二輪を壊し、罠を仕掛け、闇討ちだった。考えうる手段を用い何とか彼を戦いの場に引きずり出すところまでは行くのだが、いつもこうやってあっさり返り討ちに遭うのである。ついでに有り金も全部持っていかれる……全てはバジルに非があるのだが、妖精使いの態度だけ見ているとバジルの方が被害者に見えるのが不思議だ。

埋まった彼を引きずり出すため相棒のヘルガが必死に土を掘ろうとしているのを横目に、バジルは強く強く唇を噛む。土の香りが口の中に広がり、余計に惨めな気分になるだけだったが。

「懲りないなあ、君も」

その時、上から声が聞こえた。割れた眼鏡越しにそちらを見やると、空気に溶け込むような白いワンピースを纏った半透明の妖精がこちらを見下ろしていた。

レベントートの妖精使いが相棒にしている妖精『風』だ。緑色のリボンで結った彼女のポニーテイルは、風もないのにふわふわと揺れている。彼女自身が風なのだから当然といえば当然だが。

バジルは「はっ」と息を吐き出し『風』から目を逸らす。

「ご主人様のところに帰らなくていいのか？」

「アイツは別に主人じゃないよ。あたしは風、誰にも縛られないもの」

『風』はおかしそうに笑う。だが、おかしいのはそっちだとバジルは思わずにはいられない。

本来「妖精使い」とは単一の妖精と契約を交わすことで魔法を行使する魔道士のことだ。バジルが樹の妖精であるヘルガと契約を結んでいるのがいい例である。契約を交わすことによって初めて別世界の住人である妖精の力を借り、他の魔法には無い術を操ることができるようになる。

そう、普通はそういうものなのだ。

しかし、レベントートの妖精使いは違う。彼は妖精と契約することなしに彼らの力を振るってみせるのだ。風の妖精を連れているから風の術に特化しているのかと思いきや、森に行けば木々が味方し、川や海に行けば水が味方する。

こういう風に、地面の妖精に呼びかけて人一人埋めることなど彼にはわけないのである。

「不可解だ。不可解すぎる」

バジルは呟かずにはいられない。『風』はそんなバジルの言葉など聞こえなかったらしく、無造作に薄く透けた手を伸ばす。

「まあ、いくらむかついてるって言ってもアイツも大概やりすぎよね。ほら、手貸すよ」

「て、敵の手なんて借りる必要ない！ ヘルガ、さっさと僕を助ける！」

『風』と比べてはるかに小さい体を持つ妖精のヘルガは、妖精使いとの戦いで疲弊しながらも「頑張りますー」と健気に頷く。その様子を見ていた『風』は小さく溜息をつきつつ、言う。

「しかし、アイツの言うとおりだよ」

「何が」

「アイツ、確かにちょっと特殊だけど別に強さを追い求めているわけでも何でもないんだからさ。逆に有名になるの嫌いな奴なんだから、構わないで君が最強名乗ってればいいじゃん」

ぐ、と。バジルは言葉に詰まる。

確かにそうなのだ。楽園中にその名を知られつつあるレベントートの妖精使いだが、彼自身は本当に名声やら何やらに執着がない。それどころか、自ら妖精使いであると名乗ることも避け、できることならばレベントートの妖精使い本人だと気づかれないように旅しているようにも見受けられる。

だが、それは。

バジルはぐっと地面の中に埋まった手を握り締める。

「……そんなことは、持つ者だから言えるんだ。持つ者の、驕りだ」

「え？」

「ヘルガ！」

『風』の疑問符を無視して、バジルは声を上げる。ヘルガが辺りの木々の根と枝を操り、バジルの体を地面から引っ張り上げ、そのまま木の上へと押し上げる。おおー、と声を上げる『風』に向かって、先ほどの妖精使いではないがびしりと指を突きつける。

「奴に伝えておけ、お前をぎゃふんと言わせるまで、僕は諦めないってな！」

「ぎゃふん、くらいならいつでも言ってくれると思うけどなあ」

「そういう問題じゃない！ とにかく、絶対に伝えておけよ！」

そのまま、ヘルガの力を使って木々の合間を縫って駆け出す。『風』が何か声をかけていたようだが、もうバジルには聞こえなかった。今はただ、自分を見下ろす妖精使いのすかした表情だけが目蓋の裏に焼きついて離れずにいる。

強さを追い求めない？ 有名になりたくない？

それほどの力を持っていながら。誰とも違う力を振るってみせながら！

「馬鹿にしゃがって。絶対に、次こそは勝ってみせる……！」

微妙に的外れな決意を胸に宿し……一人の人族と一人の妖精は森の奥に消えていった。

嵐が来る……

レベントートの妖精使いは、船室に流れる空気の匂いを嗅ぎ取ってちっと小さく舌打ちする。この時期の嵐は特にタチが悪いというのに、何故。

この定期船は、航路を離れ嵐に向かっていこうとしているのだろうか。

何故と問うまでもないのはわかっているけれど。

「手前、伏せていろと言っただろう！」

少しだけ顔を上げた彼の目の前に、剣の切っ先が振り下ろされる。彼は渋々、しかし出来る限り恐怖に怯えたふりをしながら床の上に伏せる。周囲の乗客も皆彼と同じように床に這い蹲り、この場に立っているのは場違いな覆面を被った男たちだけ。

要するに……飛空艇強盗だ。

おそらくこの様子だと、操縦席も乗っ取られていることだろう。飛空艇を乗っ取っておきながら風読みの一人もいないときた。無計画にもほどがあるな、と相手には気取られないよう苦笑する。

「ね、大人しくしてる気？」

そっと耳元で空気の精、相棒の『風』が囁く。

「武器も財布も取られたのに、素直に従ってるなんて珍しいじゃん」

それは、ここを出る前に珍しくイカサマ抜きで挑んだ賭け骨牌であらかた財布の中身を空っぽにしてしまったからなのだが。基本的に妖精使いは賭事が苦手だ。駆け引きの苦手さもさることながら、彼はとことん運がない。

もし彼に運があれば、そもそも乗った定期船が賊に襲われたりもしないはずだ。

「まあ……大人しくしてりゃ解放してくれるってんだし、余計な体力使うこともねえかなと思ってたんだが」
ぼそぼそと言いながら、口の端を歪ませる。

「この調子だと、動かんとヤバいかもな」

「さっすがにあたしでもあの嵐はどうにもできないもんねえ」

「と、いうわけで協力してくれねえか『風』さんよ」

「めんどくさいけど、仕方ないか。後味悪いのはヤだもんね」

「おい、そこ！ 何をさっきからぶつぶつ……」

妖精使いの声を聞きつけた賊の一人が切っ先を再び彼に向けようとしたが……彼がそちらに視線を向けた瞬間、一陣の風とともに賊の腕から剣が吹き飛ばされた。

「な……っ！」

「借りるぜ」

全身をバネのようにして伏せた体制から立ち上がった妖精使いは、空中に浮いた剣の柄を左手に握る。その時間はほんの数秒にも満たないものだったが、この場にいる賊たちの意識をこちらに向けるには十分すぎる時間だった。

「き、貴様っ」

「舐めた真似を……！」

伏せたまま震える乗客たちを踏み越え、妖精使いに向かって飛びかかってくる賊たちだったが、風をまとった彼は浅い海色の瞳でそれを一瞥するのみ。

「人質取ってんなら、有効に使えっの。直接俺にかかってくるなんて愚の骨頂だ」

言って、何でもなような足取りで歩き出す。彼が何もしなくとも、彼の周囲に渦巻く風……『風』の操る力は賊たちの腕から武器をもぎ取り、体を床に縫い止める。情けない悲鳴を上げ次々に倒れ伏す覆面の男たちには目もくれず、彼は真っ直ぐに操縦席を目指す。

集まってくる覆面の男たちを、時には『風』が、時には妖精使い自身が無造作になぎ倒しながら。

だが、操縦席の扉の前で、彼はついに足を止めることになる。

そこに、覆面を被った大男が立ちはだかつていたからだ。

「随分、好き勝手やってくれたみたいじゃねえか、ああ？」

地の底から響く地響きのような、もしくは天上に轟く雷のような、そんな声で大男は凄む。

「お前らがバカじゃなけりゃ、俺もそこまで好き勝手はできなかったよ」

妖精使いはやれやれとばかりに肩をすくめながらも、目の前の男がこの船に乗り込んできた他の有象無象とは異なる実力者であることを見て取った。

「ほざくな、ガキが。まあ……すぐにその口も塞がるがな」

男は手にした刃を長い舌で舐める。

巨大な手に握られたこれまた巨大な曲刀は、今までに何人の人間を斬ったのだろうか、ぬらぬらと嫌な輝きを発している。この細い空間では不利にも見える得物だが、舐めてかかれば痛い目に遭うのはこちらだろうな、と妖精使いは腰に手を当てて冷静に分析する。

『風』が首を傾げて問いかける。

「ね、大丈夫なの？ あたしでも一撃じゃきつそうだけど」

『風』は空気の精でありその名の通り風を操るが、特性上、このような狭い場所では全力を発揮できない。妖精使いは先ほど覆面の男から奪った剣を手の中でのくるくる回しながら言う。

「ん……ま、そうだな。俺とお前じゃちときついだらうけどさ」

「何を一人でぶつぶつ言ってるんだ！」

男が妖精使いの言葉を遮って踏み込んでくる。妖精使いはとっさに手にした剣でその一撃を受け止めようとしたが、ぎん、という金属と金属が触れ合う耳障りな音と同時に、非力な彼の手からあっさり剣が飛んだ。

男は追撃とばかりに容赦なく曲刀を振り下ろそうとする、が。

「な、お前ら」

妖精使いの唇が、開く。

薄い笑みすら湛えながら……男の背後を見据える。

「俺らが出るまでもねえよな？」

その瞬間、男の動きが止まった。男は何が起こったかわからず何とか刃を妖精使いに叩きつけようとするが、手首を何かに強く握られているような感覚とともに、宙に縫い止められる。

目を白黒させる大男を見上げ、妖精使いは淡々と言葉を紡ぐ。

「お前さん、恨み買いすぎだ。少しそそのかしてやりゃ、こんなもんよ」

妖精使いは男の喉元に指を突きつけ、くいと曲げる。すると男の喉に指の痕だけが食い込んでいく。まるで、目には見えない指が男の首を締め付けているかのよう。しかも、それは一つではない。無数の透明な指先が、男の呼吸を奪おうと襲いかかっていた。

妖精使いは何をしたでもない。ただ……「呼びかけた」だけだ。普通ならば誰の目にも留まることない、この世界に影響を及ぼすこともできない存在に。

男ががくりと膝を折り、剣を取り落とす。既に男の顔は真っ青ですっかり意識を失っているようだった。妖精使いはふうと息をつく、虚空に向かって呼びかける。

「もうやめとけ。それ以上やったらお前らもこいつと同じだ」

彼の声に応えるかのように、辺りを満たしていた気配が大男の体の自由を奪ったままにこちらを「向く」。妖精使いはびりびりするような空気を受け止めながらもなお笑う。

「何、心配すんな。生きてる奴らにしかできねえ、最高にえげつないやり方で罰を与えてやるさ。だから今はここまでだ」

ぱん、と手を叩く。それを合図として、辺りの気配がふっと霧散した。そして、形ない力に縛られていた男の体が糸の切れた人形のように床に落ちた。

一連の様子を見つめていた『風』が「はわー」と気の抜けた声を上げる。

「えげつないなあ、それ、死霊術士のやることじゃん」

「うるせえなあ、そこにいる奴の力を最大限に利用するのが俺のやり方なの。それに」

妖精使いは倒れ伏した男の頭を踏みつけ、言う。

「奴らだって成仏できたんだからいいだろ」

窓の外には強風。そして、風に舞い踊りながら遠い世界樹に向けて駆け出す霊の姿を見つめる。神も仏もない世界に「成仏」という言葉が正しいかどうかは、妖精使いの知ったことではなかったけれど。

「さ、とっとと操縦席を奪い返すぞ。このままじゃ俺らも世界樹に還る羽目になる」

「はいな、了解っと」

妖精使いは『風』を連れ、操縦席の扉をゆっくりと開いた。

――嵐は、近い。

『楽園』全土を襲った三日三晩の激しい嵐が去って、からりと晴れた空に虹がかかったその日。ユーリス神聖国の港町レベントートで小さな事件が起こった。

一人の少年が、傷だらけで海岸に打ち上げられていたのだ。

乗っていた船が難破したのだろうか。そうは思われたが、他に人や船の残骸が打ち寄せられているわけでもなく、また少年が一糸纏わぬ姿だったのも不可思議な点ではあった。

ともあれ、酷い怪我をしていながらろうじて息のあった少年はすぐに病院に運ばれ、一命を取り留めた。しかし少年を発見した人々が安堵したのもつかの間、今度はまるきり別の問題が浮上してしまった。

少年は、自分の名前も何処から来たのかも覚えていなかったのだ。しかも、こちらの話はかろうじて理解しているようだが、自分で喋ることが全くできないようだった。

頭を強く打っていた様子だったため、それが原因で記憶と言葉を喪失してしまったのだろうと医者は断じた。これには町の人もしっかり困り果ててしまった。少年を故郷の親元に送り返すことも出来ず、一体どうしていいものかと首を捻ることしか出来なかった。

少年は少年で、そんな自分の状況を不安に思っていたのか、病院のベッドの上できょろきょろと辺りを見渡しては、沈んだ表情で俯くばかり。

そんな折、少年を見ていたとある老夫婦が、自分の家で少年を引き取ろうと提案した。少年の身元がわかるその時までは、家族として一緒に暮らそうと言い出したのだ。少年は驚きをもってその提案を聞き……申し訳なさそうな顔をしながらも、「ありがとうございます」と深く頭を下げた。それが、少年が初めて明確に放った言葉でもあった。

少年は自らにまつわる記憶こそなかったが、不思議なことに知識は豊富だった。言葉が自由になると少年を引き取った老夫婦も驚くほどの知識を披露し始めた。また、勉強熱心でもありどんなことでも積極的に調べ自らのものにしていった。

それにつれ暗かった少年の表情も段々と明るくなり、町に流れ着いて一年もたたないうちに、自然と少年は町にとけ込んでいた。記憶が戻ることはなかったが、引き取り手である老夫婦とまるで本当の家族のように幸福な毎日を送っていた。

だが、ある日、その少年に転機が訪れる。

少年を知っているという一人の少女が、レベントートの町を訪れたのだ……

「で、当時の『少年』ことアンタは何も言わずに逃げ出しました、と」

「はい、逃げました！ 脱兎ですよ悪かったなこんちくしょう！」

レベントートの妖精使いは相棒の『風』にわめき散らす。少女の姿をした『風』は、大げさに肩をすくめて呆れたため息をついてみせた。

「逃げなくたっていいじゃん、せっかく自分を知ってる人が来てくれたのに……それとも」

『風』はそっぽを向く妖精使いの顔を大きな緑色の瞳でのぞき込む。

「何か、その子が来て都合の悪いことがあったとか？」

妖精使いは難しい顔で沈黙を守るが、額にはすごく嫌な汗をかいている。元より、彼は嘘をつくのも黙っているのもことん苦手なのだ。それを見て『風』はにやにやと笑みを浮かべて言った。

「実は、記憶喪失とか嘘なんですよ」

「はい、そうですよ！ 嘘ですよごめんなさい！」

この場に謝るべき人間がいるわけでもないのだが、やけっぱちになって叫ぶ妖精使い。相変わらずからかうと面白いなあ『風』は人事のように思う。実際に人事だが。ぎっとこっちを睨みつけてくる妖精使いだが、妖精使いの目つきが凶悪なのはいつものことだ。『風』はそれこそ「何処吹く風」といった風に問い返す。

「何で記憶喪失のふりなんかしてたのさ？」

「別に、全部『ふり』なわけじゃねえんだよ。名前と出身地が『無い』のも、喋れなかったのもマジ。そんな状態じゃ、下手に説明するより記憶喪失とか言ってた方がまだマシだろ」

「何か、あたし以上に不思議な経歴なんだねー」

妖精としては相当特殊な部類に入る『風』だが、別段妖精使いの特殊な境遇にはそこまで興味ないらしく、くるくると踊るばかり。まあ、お前がそういう奴だから気楽に話せるんだが、と妖精使いも息をつく。

「で、そんなとこに俺の知り合いが来ちゃったわけよ。別にそいつが何したってわけじゃねえんだけど……何ていうか、昔の仲間に会えとか何とかうるせえんだよ」

「いいじゃん、会ってくれば」

「会えるか！」

びしっ、と妖精使いは『風』を指さす。

「いいか、俺はそいつとはすっげえかっこよく別れたんだ、もう二度と会わない覚悟でな！　つか二度と会えないような別れ方しちまったんだよ！」

「あーあー、あれね。『俺の分まで、お前は生きるんだ……』みたいな」

「くそっ、ほぼ正解なのが腹が立つ！」

やっぱり凶星なのか。

あまりに単純すぎる展開に『風』は再びため息をつく。妖精使いは「きいっ」とヒステリックに声を上げ、ぶんぶんと腕を振る。

「手前、単純とか思っただろ！　思ったよな！」

「思ったに決まってるじゃん単純バカ」

「うるせえ！　とにかく、んな別れ方しちまった手前、のこのこ出てきて『元気ー？　実は俺も元気にやってたんだぜへっへー』とか言うわけにはいかねえの！　わかる？」

「事実なんだから言えばいいのに……」

「俺のプライドが許さねえの！」

安っちいプライド。

そうは思ったが、口に出さないのが『風』に残された一握りの優しさである。このレベントの妖精使い、目つきと口は悪いがとつてもナイーブな心の持ち主だったりする。これ以上言ったらきつと壁に向かってしくしく泣き始めるので鬱陶しいことこの上ないのである。

「逃げたところで解決しないと思うけどなあ」

「解決しねえさ、せめて猶予がほしいんだ！　モラトリアム期間だ！」

「あー、これだけ言っても会いに行く気はあるんだ」

妖精使いの言葉に、『風』は思わずくすくすと笑ってしまった。

何だかんだ文句を言いながらも、いつも妖精使いは自分のすべきことはすべきこととして理解している。それをすぐに実行に移すかは別としても。

不機嫌そうにそっぽを向く妖精使いの肩に腕をかけて、『風』が楽しげに囁く。

「そのお仲間、きちんとあたしにも紹介してね」

「へいへい、わかってますよ。っと、雨も止んだな」

妖精使いは大樹から背を離し、木の下から顔を覗かせる。今まで散々降っていたはずの雨はいつの間にかやばたりと止んでいて、それどころか明るい日の光が雲の合間から降り注ぎ始めていた。これから彼が歩いていく道無き道を示すかのよう。

あても無い旅を永遠に続けていくつもりはない。いつかは帰るつもりだし、会わなければならない人にもきちんと挨拶をするつもりだ。あの時は本当に勢いで町を飛び出してきてしまったけれど、帰る場所があると信じられているだけ、自分は幸福なのだ。

旅をするということは、自分にとっては幸福を確認する行為でもあるのかもしれない。そう、妖精使いは思い始めてもいた。

そして、彼は一歩を歩み出す。肩にしがみついたままふわふわと宙に浮かぶ『風』にほんの少しの笑みを向けて。

「さ、行こうぜ」

雨が止めば虹が出る。それこそ、彼があつ町に流れ着いた日と同じように。

今日もまた、虹の根元から妖精使いの旅は始まるのだ。

あるところに、一人の女の子がいました。

女の子は重い病を患っていて、自分の部屋のベッドから降りることもできませんでした。そんな女の子のお友達は外の世界を描いた絵本と、ベッドの横にある大きな窓の外の景色だけでした。

毎日毎日、女の子は絵本の中の魔法使いたちを夢見て、窓から見える空を見上げていました。女の子は特に夜の空が大好きでした。真っ暗な空に輝く金と銀のお星様、まるでお皿のように大きな大きなお月様。もっと小さな頃には、あのお皿に手が届くのだと信じてよく手を伸ばしていたものでした。

今は、余りに遠くにあるものだという事も、知っていましたが。

その日は、いつもよりずっと高い熱が出て、とても苦しい日でした。眠っているのか覚めているのかもわからない悪い夢を見続けて、気づけば真夜中になっていました。ずっと熱が引いた気がして、目を開けると……いつの間にか開いていた窓から、まん丸いお月様が金色の光を投げかけていました。

そして。

ふわり、と。

カーテンを揺らして、夜の風が部屋の中に入ってきました。

その風は、一人の男の人の姿をしていました。窓枠に足をかけた男の人は、ぼんやりと月の光に照らされながら、珊瑚礁の海のような瞳でこちらを見下ろしていました。

泥棒か何かでしょうか。思わず声をあげようとした女の子でしたが、男の人は唇の前に指を立てて「静かに」と囁きます。その声が思ったよりもずっと優しい声だったので、女の子も素直に唇を閉ざしました。

それにしても、この人は一体何者なのでしょう。女の子は首を傾げてしまいました。女の子のいる部屋は二階なのです、壁を伝って上ってきたのでしょうか。それとも……

まさか、そんなことはあるはずありません。

男の人が、「空を飛んできた」なんて。

「人が空を飛んじゃおかしいか？」

男の人は女の子の心の中を読んだかのように、眉をぴくりと動かして言いました。だけど、おかしいに決まっています。空を飛ぶ魔法なんて楽園のどこにもないことくらい、部屋から出たことのない女の子だって知っています。

確かに、絵本の中では不思議な魔法を使う魔法使いがたくさん出てくるものですが、それはあくまで物語の中の話。そう女の子が言うと、男の人は笑いました。唇の端っこをきゅっつつり上げるだけの、不思議な笑い方です。

「それなら、試してみるか？」

男の人は、そんな笑みを浮かべたまま、女の子に向かって手を伸ばしました。

もしかすると、これも夢の続きなのでしょう。こんな不思議なこと、現実にあるとも思えません。けれども、夢であるのならば……それこそ空を飛べたって、おかしくないのかもしれない。女の子はおそるおそる男の人に向かって手を伸ばしてみました。

すると、男の人がぎゅっと女の子の手を握りしめました。男の人の大きな手は、夢とも思えないほど温かいものでした。

「絶対に離すなよ」

男の人は海色の瞳で女の子を見下ろします。

「落っこちても責任は取れねえからな」

女の子はこくりと頷いて、強く強く男の人の手を握り返します。男の人は満足げに頷きを返すと、ベッドの上から女の子を引っ張りあげてそのまま窓枠を蹴りました。

途端、女の子の体を風が包み込みます。それは決して身を切り裂くような激しいものではなく、春のそよ風を思わせるとても優しい風。部屋の中では決して感じるこのできない柔らかな草の香りに包まれて、女の子は思わず目を閉じました。

次に目を開けたときには。

女の子は、町を遙か足下に、夜の空に浮かんでいました。空には星、足下にはぼつぼつと灯る町の灯り。世界の全てが星に包まれているようで、女の子は思わずわあと声を上げました。

まさしく、ベッドの上で夢見ていた世界がそこにありました。いえ、もちろんこれも夢なのかもしれませんが。いつもの息苦しさも、体の重さありません。澄んだ夜の空気を胸一杯に吸い込んで、軽くなった体はふわふわと風船のように浮かび上がっているのです。

男の人は女の子の手を引いて、もっともっと、高みへと連れていきます。温かな指先と優しい風に導かれて、女の子は風の音渦巻く空を駆けていきます。

高く、もっと高く。

目指す場所は……小さい頃に夢見た、お月様。

「ほら、今日はこんなに月が綺麗だ」

男の人が穏やかな声で囁きます。

ああ、こんなに高く飛べるのならば、今度こそ手が届くのかもしれません。空に引っかかる、まん丸の月に。片手に男の人の手を握ったまま、ゆっくりと手を伸ばして――

その指先の感覚を信じて、目を、閉じたのです。

永遠に。

「……よかったの？」

青い空の下、耳元で囁く声。レベントートの妖精使いは海色の目を細めて「さあなあ」と呟いた。彼の視線の先には白い服を身にまとった人々……葬列の風景。その中心では、やけに小さな木の棺が色とりどりの花に囲まれていた。木と花に愛されたユーリス神聖国ならではの「花葬」である。

空気の精である『風』もまた、妖精使いにならって新緑色の瞳でその様子を見つめている。二人は葬列に加わることもせずただ立ち尽くす。

その時。

少女の無邪気な笑い声が、風の中に聞こえたような気がした。

声を聞き届けた妖精使いはあの時握った少女の手の小ささを確かめるように、手を握って開く。そして、ほんの少しだけ微笑んでみせる。ぎこちない、不格好な微笑みではあったけれど……せめて、空の向こうで笑う少女に応えられるように。

風が笑う。花が揺れる。

少女の声は二度と聞こえない。

「行くか」

「うん」

短い言葉を交わして葬列に背を向ける妖精使いと『風』。空に消えていった少女を弔う歌を聞きながら、妖精使いは道を蹴る。『風』に支えられ、彼の体はふわりと浮かび上がり……そのまま雲の向こうに消えていった。

気づけば、彼は真っ白な世界に立っていた。

右も左も、それどころか上も下もわからない白い空間。自分は立っているのか伏しているのか、それすらわからない。辺りを見渡してみても、入り口や出口に当たるものが一つも見あたらないのだ。

白い世界を包むのは、耳がきんとするほどの静寂。

普通ならば恐ろしいとでも感じるのかもしれないが、不思議と彼は落ち着いた心持ちで真っ白な世界に立ち尽くしていた。

その時、唐突に静寂を切り裂いて声が響いた。

「よう、久しぶりだな」

彼はふとそちらに視線を向ける。すると、何も無いと思われた白い空間に明るい色が生まれていた。稲穂色の髪に、片目だけのアイス・グリーン。昔はあれほど「身を切るほどに冷たい」と思われた色も、今となっては優しい雪解けの色を湛えている……そう、彼は頭の片隅で思う。

青い衣を纏った氷の眼の男は、彼を真っ直ぐに見据えにやりと笑いかける。

「何だ、今日は泣いてねえのか、泣き虫」

「あん？ 誰が泣き虫だったことがあんだよ」

彼は眉を寄せて言い返す。だが、隻眼の男はけらけら笑うだけで取り合おうとしない。

「ははっ、実際に泣いてなくてもいつも泣きそうな顔してたじゃねえか。唇噛んで、歯あ食いしばってさ。ちょっと人より強がりなだけのガキだよ、お前は」

「……うるせえ」

否定は出来なくて、彼は照れを隠すようにそっぽを向く。そうでなくても彼が人と目を合わせるのを苦手としていることくらい、目の前の男もわかっているはずだ。

わかっている、この男は彼の目をわざとらしく覗き込んでくるのだが。

そういうところは、相棒の『風』に似ていると思う。『風』の顔は嫌というほど見ているからもう慣れっこになってしまったが、この男の目を見つめているのはやはり慣れない。吸い込まれそうな、金属質の緑色。透き通っていて、透き通りすぎていて、まるで作りもののような錯覚すら抱かせる瞳。

かつては、何よりも恐ろしかった瞳。

その瞳が、不意に笑みに崩れた。

「でも、よかったよ。ちょっと心配してたんだが、なかなか上手くやってるじゃねえか」

「はっ、俺は元々世渡りは下手じゃねえんでな。誰かさんと違ってさ」

誰かさん、と言われた男は「はは、言えてらあな」とおかしように笑う。一度くらいはこの男に不機嫌そうな顔をさせてみたいと思うが、何を言っても軽くあしらわれるだろうことも十分予測の範囲内だ。ホントこいつには一生敵わねえやな、と彼は小さく息をつく。

息をついてから、絶対に問わなくてはならないことに今更ながら気づく。当たり前のように喋っていたが、自分が立っている場所も、突如として現れたこの男だって明らかに異常なのだ。

彼は曖昧な肉体の感覚を確かめるように、腕を組み男を睨む。

「で、今更俺に何の用だよ、カミサマ」

カミサマ、と呼ばれた男は軽く肩を竦めてみせる。

「いや、ちょっとお前に渡しておきたいものがあるな」

言いながら男はすっと彼の手を取った。彼は反射的にびくりと体を震わせる。恐ろしい、そんな風に思

う理由はないのに自然と体が強ばってしまう。流石に彼の反応とその理由に気づいている男は苦笑を浮かべる。

「そんなに怯えんなよ」

「わ、悪い」

「ま、怯えられんのも仕方ねえか、自業自得だ。だけど、これだけは渡しておきたかったんだ」

重ねられた手の中に何かがあるのに気づいて、彼はそっと手を開いてみる。

そこにあるのは、時計だった。手の平ですっぽり包み込めるほどのサイズの懐中時計。微かにくすんだ銀色の蓋を開けてみると、文字盤に開けられた覗き窓から無数の歯車が噛み合わさり針を動かしているのを見てとれる。

その中心に嵌め込まれた石の色は、光を含んだ海のアオ。

「……これ、は」

時計だ。まごうことなき螺子巻き時計。

だが、この男……カミサマが持つ『時計』には何よりも特別な意味がある。男はしっかり頷いて、彼の目を見据える。

光を含んだ海のアオを湛えた、彼の瞳を。

「そうだ。これが『お前の時間』だ」

「何で」

声は喉に引っかかって、上手く言葉にならない。だが彼の言いたいことを汲み取って男は笑顔で言葉を続ける。

「何でも何もねえよ。お前はここに立っている。この世界に生きてるじゃねえか」

「だけど。」

言いかけた彼の頭を男は乱暴に撫でる。ぐしゃぐしゃと、彼の柔らかな髪を弄びながら男は笑う。笑い続ける。

「もうお前は作り物じゃねえだろ。誰の複製でもない」

時計を握りしめた手が、熱い。

彼の頭を撫でながら男は氷の色をした片目を細める。それはとても穏やかで、全てを包み込むような温かな笑み。

「お前はお前自身の運命を生きろ、カイル・フローウエン。誰が何と言おうとも、俺様、世界律カレス・ピースメーカーが全てを許してやる」

「……る……」

「ん……」

「かーいる！ ちょっと大丈夫？」

聞き慣れた声に、彼は目を開ける。目の前には、若葉の色をしたまん丸い双眸があった。いつの間にか白い空間とあの男の姿は消え去っていて、代わりに相棒の『風』が珍しく不安げな顔でこちらを見つめていた。

どうやら自分は、気づかないうちに草の上に倒れ込んでいたらしい。ゆっくりと体を起こして軽く頭を振ってみるが、特に異常は感じられない。元気そうな妖精使いの姿を見た『風』は深々と安堵の息をついて言った。

「急に倒れるからびっくりしたよ。ホントに平気？ 熱とかない？ 逆に寒かったりしない？」

「ああ、大丈夫大丈夫」

ひらひらと手を振って返そうとして……手の中に何かを握り込んでいることに気づく。そっと開いてみれば、そこには銀色の懐中時計があった。中心に輝くアクアマリンは、一秒一秒を噛み締めるようにゆっくりと、しかし確かに回り続けている。

『お前は、お前の運命を生きろ』

氷色の瞳が、記憶の奥底で笑う。

「あれ、それどうしたの？ そんな時計持ってたっけ？」

「ん……まあな」

『風』の言葉には曖昧に返して、視線をある一点に向ける。

小さな丘の上に、ぽつりと置かれた石碑。雲間から射し込む光に照らされる、まだ新しい誰かの墓がそこにあった。そこに眠る一人の男の姿を脳裏に思い描きながら、彼は目を伏せて呟いた。

「……ありがとな」

この瞬間から、やっと自分自身の時間が動き出したのだ。その実感と共に、銀色の時計を握りしめる。

これからは自らの足で立ち、この場所で生きていく。最後まで生き抜いてみせる。そして。

——この『楽園』で、他でもない「俺」の物語を紡ごう。

レベントートの妖精使いは、相棒の『風』と共に一つの村を訪れた。ユーリス神聖国の辺境にある森林の村、エルスティア。そこは、普段の静けさとは違う宴の気配に満ちていた。

一体、何があるのだろうか。

そう思い妖精使いが村人を捕まえて問うたところ、どうやら村で生まれ育った娘の結婚式が明日に迫っているのだという。それはめでたいことだと『風』も何故か自分のことのように喜んだ。

ただ、妖精使いだけはどこか複雑そうな面持ちでその話を聞いていた。どうしたのだ、と『風』が問うても多くは語らず黙り込むばかり。しかし、そんな彼の様子に気づくことも無い村人たちは、是非花嫁を祝ってやって欲しいと妖精使いを花嫁の前まで連れて行った。

ちょうど衣装合わせの途中だったエルフの花嫁は、突然の妖精使いの訪問にも迷惑そうな様子一つ見せず、彼を歓迎した。羽のような質感を持つ純白のドレスに、長く伸ばした鮮やかな赤毛がとてもよく映えている。

花嫁は妖精使いが各地を巡っている旅人であると知ると、妖精使いに楽園の様子を聞いたがった。妖精使いは乞われるままに色々な話をした。暴風の中で笑う風の海の王の話、空を行く砂色の鯨の話、ことあるごとにしつこく追いかけてくる妖精使いの話、空賊に襲われた時の話。その全ての話を花嫁は目を輝かせながら聞いていた。

そんなに外の話が珍しいのか、と。

妖精使いが問い返すと、花嫁は首を横に振った。花嫁が語るには、彼女も元々は旅人だった。各地を回り、色々なものを目にしてきた。それこそ、妖精使いが見てきたものと同じくらい素敵なものに出会ってきたはずだ、と花嫁は笑う。

だが、出会いがあれば当然別れもある。

言葉に出来ないほどに悲しい別れがあったのだ……そう、花嫁は言って笑みを少しだけ歪めた。その別れがきっかけで、花嫁は旅をやめて生まれ故郷であるエルスティアに帰ってきた。しかし、戻ってきたところで別れの光景は目蓋の裏に焼きついて離れない。戻ってきてからしばらくは、寝ても覚めても涙を流す日々ばかりが続いていた。

ただ、そんな彼女を温かく見守ってくれた男がいた。彼は悲しみにくれる彼女に優しい言葉をかけ、その悲しみが癒え、一つの思い出になるまで側につき従った。決してそれは短い時間ではなかったけれど、彼は何かあろうとずっと側にいてくれたのだと花嫁は言った。

そして明日、花嫁はその男と結婚する。

まだ別れの記憶は自分の心の中に残り続けている。けれども、その記憶も痛みも全て抱きしめたままの自分を好きだと言ってくれた。その彼と一緒にになれるのはとても幸せなことだと彼女は言い切った。

妖精使いはしばらく黙って花嫁の話を聞いていたが、花嫁の言葉が途絶えたところではにかむように微笑み、

――よかった。

――忘れないままでも、前に進めるんだな。

――おめでとう。

そう、言った。

妖精使いの言葉の意味を量りかねた花嫁は首を傾げるが、妖精使いはそれ以上語らずに、手袋を外し手を差し伸べた。花嫁の幸せを少しだけ分けて欲しい、と小さな声で呟いて。

花嫁はそっと、両手で妖精使いの手を包む。長らく旅人だった彼女の指先は少しだけ硬く、それでもとても、温かった。

妖精使いはその手の感覚を確かめるように、強く、強く握りしめて。

「俺は幸せになるから。アンタも幸せにな」

「……え？」

「じゃ、またな、」

妖精使いの唇から放たれたのは、花嫁の名前。村の誰も知らなかったはずの、かつての呼び名。花嫁ははっとして妖精使いの名を呼ぶが、妖精使いはろくに返事もせずに花嫁に背を向け駆け出す。

それでいいのか、と『風』が耳元で問う。

それでいいのだ、と妖精使いは笑う。

彼女の手を握ることが出来た、その幸せだけで十分だ。

それに、これが最後というわけじゃない。だからいいのだと言って、妖精使いは地を蹴り『風』の手を取って空の向こうへと飛ぶ。

空を見上げ、懐かしい名前を呼ぶ花嫁の声を背負って。

レベントートの妖精使い- 空の章

<http://p.booklog.jp/book/21266>

初版：2009年5月17日

電書版初版：2011年2月26日

著者：青波零也

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/aonami/profile>

著者サイト「シアワセモノマニア」：<http://happymonomania.sakura.ne.jp/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/21266>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/21266>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ